



稲作情報



JA秋田ふるさと 営農経済部 米穀課 ☎ 23-6556

各営農センター

金沢 ☎ 37-2124 大雄 ☎ 52-3665 横手 ☎ 32-8220 増田 ☎ 45-2035

平鹿 ☎ 24-3110 十文字 ☎ 44-3101 大森 ☎ 26-4155 雄物川 ☎ 22-2266

秋田県農業共済組合 県南支所 ☎ 0187-63-1066

農産課(農作・畑作・果樹・損防・収入保険) ☎ 0187-66-9112

資産課(園芸・建物・農機具) ☎ 0187-66-9111

家畜課(家畜) ☎ 0187-66-9113

秋田県平鹿地域振興局 農林部 農業振興普及課 ☎ 32-1805

横手市農林部 農業振興課 ☎ 32-2112・32-2113



浸種積算温度確保と均一催芽 出芽を揃え、健苗につなげましょう!



ふるさと稲作ほっと
LINE QRコード
友だち登録をお願いします!

いよいよ浸種～播種作業に入ります。浸種期間中は水温・水量の確保、衛生的な水交換に努め、播種は右図のようなハト胸状態を確認してから行いましょう。(稲作情報No.1 参照)

温湯消毒種子を使用する場合、イネばか苗病等防除を補強するため、タフブロックを推奨します。最も防除効果が高いのは催芽時のタフブロック使用です。防除効果を発揮する30℃の催芽温度をしっかり守りましょう。
※特別栽培米の方は特にオススメします。



★苗の種類に合わせた適正播種量を!

「サキホコレ」は中苗が基本です。

◆播種量の目安

苗の種類	播種量 (1箱当たり)		目標葉数	育苗日数
	乾 籾	催芽籾		
中苗	120g	150g	3.0～3.5葉	28～30日
稚苗	160g	200g	2.5～3.0葉	23～25日
密苗	240g	300g	2.0～2.3葉	18～20日

播種時のポイント

- 目標とする苗の種類と育苗日数に合わせて播種日と播種量を決定しましょう。稚苗と密苗は育苗日数が長くなると、老化苗(地際のムレ)につながります。
- 播種時のかん水量をチェックしましょう。かん水は2.0～2.5%が適量となります。少なすぎると水分不足から発芽不良となります。→育苗マット注意(育苗パワーマット等)
- 水がひく前の覆土は酸欠による発芽不良の原因となりますので水がひいてから覆土がかかるようにします。
→焼土等粒子細かい土注意

1. 育苗期管理

《温度管理》

早朝や風が吹くと人は寒く感じても、ハウス内は陽が射すと、すぐに高温になります。必ず温度計を設置して、急激な温度変化やハウス内温度の上がりすぎに注意しましょう。

播種後から出芽までの日中のハウス温度は、32℃を越えないように換気し、被覆は出芽長1cmを目途に除去しましょう。育苗後期(硬化期以降)はできるだけ外気にならし、健苗育成に努めましょう。

※新しいビニールに張り替えた方は高温障害に特に注意を!!

(晴天日は換気をしっかり行うこと)

《水管理》

出芽後のかん水は、床土の水分状態を確認し、朝早いうちに行います。午後からのかん水は地温を下げかつ夜間の過湿につながり根張り不良や軟弱徒長の要因となります。

特に、育苗後期から低温が長く続く場合、「ピシウム菌」による苗立枯病の発生リスクが高まります。また、過乾燥も「トリコデルマ菌」による苗立枯病の発生原因となるため苗箱内の乾燥時は再かん水が必要な場合もあります。苗箱内の水分状態を確認し、適切な水管理を心がけましょう。

サキホコレは中苗が基本



《苗立枯病対策》

苗立枯病は、寒暖の差により苗箱内の生育環境が悪くなり、根の機能低下によって起こる病気です。発生してからでは手遅れとなることがありますので、健苗育成とプール育苗やタチガレエースM液剤等の薬剤処理により予防に努めましょう。初期の発病を見逃さないよう観察し、発病が見られた場合カビの種類(色)・被害の程度を確認しながら、「苗立枯病」の早期防除が必要です。対策についてはJA各地区の営農センターへご相談ください。

2. いもち病の育苗期防除

本田における「葉いもち病」の多発主要因は、育苗期間中にいもち病に感染・発病した苗の“持ち込み”によるものです。育苗施設内やその周辺に稲わら・籾殻が伝染源となりますので放置せず、適切な育苗管理、育苗期防除による健全な苗の田植えが予防の基本です。

◆いもち病の感染源をなくす

『乾燥状態で冬を越した稲わら・籾がら』には、いもち病菌が付着しており、そのいもち病菌が苗に感染することで葉いもち病の発生を助長します。

作業場内や水稻の育苗施設内及び周辺に籾がら・稲わらが放置又は保管されている場合は、作業前に必ず掃除・撤去して下さい。

◆育苗期防除

育苗期のいもち病防除剤「ビームゾル」

使用時期：緑化始期(本葉第1葉完全展開時)

使用倍率：500倍(500ml/箱散布)

※特別栽培米には使用できませんのでご注意ください。

※使用時期の遅れや極端な高温(30℃以上)が続くと、葉先が黄化する場合があります。(その後回復します。)



籾殻



稲わら

3. 箱処理剤

葉いもち病・初期害虫～イネアオムシまで防除できる箱処理剤は、薬剤によって使用時期が異なります。間違えないように確認して使用しましょう。

◆床土混和～播種時に使用できる主な薬剤

資材名	特別栽培米使用可否	使用時期	使用量	適用病害虫
ブーンパディート箱粒剤	特別栽培米に使用可 (令和8年新規採用)	床土混和～移植当日	50g/箱	いもち病・もみ枯細菌病・穂枯れ(ごま葉枯病)・イネミズゾウムシ・イネドロオウムシ・イナゴ類 等
ファーストオリゼパディート粒剤	特別栽培米に使用不可	床土混和～播種時 (覆土前)	50g/箱	いもち病 イネミズゾウムシ・イネドロオウムシ・イナゴ類 等

※高密度に播種する場合は1kg/10a(50～100g/箱)の使用量となります。

★近年、もみ枯細菌病の発生が多く見られます。発生を防ぐため、適正な温度・水管理、適度な換気が重要となります。

○もみ枯細菌病は、催芽～緑化期の高温・過湿状態で発生しやすい病気です。

○特に出芽後の再被覆により発生しやすくなります。

＜病徴＞初期症状は葉身基部が黄白色になり、次第に暗褐色となり坪状に腐敗枯死する。

育苗管理

出芽長の伸ばしすぎは「腰高の軟弱苗」につながります。被覆資材の取り遅れに注意!!

		出芽～不完全葉	1葉期 (10日～15日目)	1.5葉期(10日～15日目)	2.5葉期 (20日目)	3葉期 (25日～30日目)	3.5葉期(30日～35日目)	
ハ ウ ス	加温育苗 (育苗器)	<ul style="list-style-type: none"> 出芽は30～32℃の適温で出芽長1cmを目標にする。ただし、育苗器内の余熱を考え、覆土から見える芽が3mm位になったら電源を切る。 出芽から緑化に移す場合は温度を25℃前後まで下げる。 置き床は、極端に乾燥していない苗床に、箱を並べる。 覆土が持ち上がった場合は、かん水し、露出した種籾には必ず土をかける。 前半弱光、後半直射光とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●温度管理 ○極端な温度変化をさける。(適温25℃前後) ○日中の最高温度は27℃位に。 ○夜間は最低10℃位を保つため、夕方早めに閉める。 	<p>温度管理</p> <p>日中の温度</p> <p>最低温度</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○日中はできるだけ屋根ビニールを開ける。 ○適温は25℃ ○第1葉鞘高は2.5cm、草丈3.5cm位が健苗の基本。 ○水分状態は、夕方箱土の表面が白く乾き、翌朝湿っている程度。 ○かん水は早朝に行う。 ○育苗マットを使用した場合や箱土が白く乾きすぎた場合は十分にかん水する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○日中 20℃位 ○夜間 10℃位 ○徒長に注意。 ○草丈10cm (2.5葉期以降) から温暖な日は、夜もハウスを開放する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○徐々に夜間も外気にならず。 ○かん水は早朝に行う。 ○ムレ苗に注意。 	<p>【追肥】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○中苗 2葉期と3葉期頃 ○稚苗 1.5葉期頃 液肥2号 100倍0.5ℓ/箱 追肥後は軽く散水し、葉についた肥料を流すようにする。 アミグロ液肥500倍液 500cc/箱 100%有機肥料の為特別栽培米に使用可能。 【弁当肥】…田植前日 サイコー11号 (13-13-13) 10g/箱 ※「育苗マット(育苗パワーマット等)」を使用する場合は肥料切れが早い傾向がありますので、2葉期頃から田植まで1～2回追肥の実施をお奨めします。
	無加温育苗	<ul style="list-style-type: none"> ○30℃前後の適温を保ち、高温の時は換気する。(被覆資材の種類に注意) ○出芽長8～10mmで被覆資材を取る。 ○覆土の厚さに注意! 見かけの出芽長が8mmでも覆土の厚さを忘れずに。 	<ul style="list-style-type: none"> ○被覆期間の水分が少ないと根上がりや、高温障害(ヤケ)が出やすい。 ※覆土の持ち上がりや、根上がりがある場合は、早めに水で落とし、種籾が、露出したら必ず土をかける。 					

方 式	出芽から1葉までは、上記と同じ管理となります。	かん水の目安とハウスの開閉
	<p>ハウスプール育苗</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ハウスプール育苗の注意点 ・入水は基本1葉以上展開したら行い、基本箱土まで入水する。 ・箱土以上入水後サイドビニールは常に開放する。 ・低温時は水位を苗丈の3分の2まで湛水・保温し、高温時はハウスビニールをできるだけ全開し、水を入れ替えて水温を下げる。 	
	<p>露地プール育苗</p> <ul style="list-style-type: none"> ○露地プールの注意点 ・必ず育苗器で出芽させる。露地のため雨風にさらされる。緑化までは上に黒いラブシート、下に白いラブシートなど被覆資材で保温すること。 ・入水は基本1葉以上展開したら行う。 ・露地プールの苗は強い稲になるが、草丈が短く葉色が淡くなるため、アミグロや液肥2号を追肥し生育を促進させる。 ・ハウスプール育苗よりも生育が遅いため育苗期間を長くすること。 	

葉 齢	播種	出芽	1葉	2葉	2.5葉	3.5葉
かん水及び湛水深			○床土まで	○低温時は深水 ○床土上あるいは1葉の付け根まで		
置き床準備	出芽	緑化	湛水開始		落水	移植
ハウスビニールの管理	○出芽～1葉は通常の育苗管理 ○入水前は生育の揃いに注意		○昼夜ハウスを開放する(裾全開あるいはビニール撤去) ○低温・降霜が予想される場合は裾ビニールを閉める			
○置き床の均平 ○マット敷き ○床土量の調整 ○新聞紙敷き ○育苗箱を並べる	○出芽～1葉は通常の育苗管理		○1～1.5葉で湛水 ○ハウスの裾は夜間も開放(降霜時は保温)	○温度管理に注意 ○徒長しやすい	○追肥は上記参照	○2・3日前に落水

露地プール育苗の湛水後の管理は基本ハウスプール育苗と同じですが、雨風にさらされるため低温時は深水にし、保温に努めてください。

～水稲育苗ハウスで後作に野菜を作付される方へ～ 育苗期間中に使用した農薬が、後作の野菜に吸収され、残留農薬の基準を上回る事例があり、出荷停止・回収対象となる危険があります。農薬が土壌に浸透しないよう、「苗箱の下に無孔のポリを敷く」または「プール育苗にする」「箱施用剤は田植当日にハウスから外に移動してから散布する」等の対策を実施してください。

土 づ く り	<p>近年は登熟期間の高温・少日照等の気象変動による品質の低下が懸念されています。品質の良い作物生産の基本は土づくりです。本来水稲はチッソ成分の10倍ケイ酸を必要とする作物です。</p> <p>ケイ酸を含んだ土づくり肥料を積極的に施用しましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ケイ酸は根を健全に保ち、稲体の体温を冷やすクーラーの役割があります。 →乳白・倒伏軽減・粒張り向上 ●割れ籾を防止し、カメムシの被害を軽減する効果があります。→斑点米予防・軽減 <p>※ケイ酸を含んだ土づくり肥料と目標施肥量</p> <ul style="list-style-type: none"> *けい酸加里プレミア34 20～40kg/10a *シリカ未来 20～40kg/10a *マルチサポート2号 20～40kg/10a *ケイカル 80～100kg/10a <p>混合りん肥新3号、苦土重焼燐もケイ酸を含んでいます。</p>	畦畔管理	<p>畦畔除草剤成分カウントの取り扱い</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ふるさとecoらいつ 田植え前までの使用はカウントなし ●特別栽培米 令和7年産収穫後から令和8年産圃場入水前までラウンドアップマックスロード1回のみ使用できます。 <p>ネズミ穴の補修や、畦畔のかさ上げ等畦畔整備は、本田の初・中期一発除草剤散布後の水持ちに大きく影響しますので必ず行いましょう。初・中期一発除草剤の効果発揮により雑草を抑えることが、カメムシ予防対策に直結します。</p>	耕起作業	<ul style="list-style-type: none"> ●作業能率の向上を目的にトラクターの作業速度が早くなる傾向が見られ、耕深が浅くなっています。浅耕は根の張る領域が制限され肥料切れが早まります。さらに、わらや稲株が田面に露出しやすくなり、地温上昇に伴ってガスわきが起り、初期生育が劣る原因となります。 ●発根の活力を高め品質・収量を確保するため、耕深は15cm確保を目標としてください。 ●作土層が均一でないと、代かき・田植え作業に影響します。一定の耕起作業を実施しましょう。機械操作はあわず安全に行いましょう。
------------------	--	------	--	------	--